

守山市発達支援センターだより

令和3年9月号

守山市発達支援センター(発達支援課)
守山市下之郷三丁目2番5号 すこやかセンター内
Tel:077-582-1158 Fax:077-581-1628



特別支援教育研修会

第1回特別支援教育研修会を6月23日(水)に開催しました。びわこ学院大学教育福祉学部スポーツ教育学科教授の小西喜朗氏を講師にお迎えし、目の前の子どもを理解するために大切な視点や心構え、保護者対応などを、理論とともに講師が体験したエピソードを交えてわかりやすくご講演いただきました。参加者からは、「“先入観により見誤ることがある”事実をしっかり見て、真実を見抜く力を身につけたいと思った」「子どもとの信頼関係を築き、保護者の安心と信頼関係につなげていきたい」など、たくさんの感想をいただき、有意義な研修会となりました。支援の現場で役立ててもらえるように、研修会や啓発活動に今後も取り組んでいきます。



進路交流会

8月5日(木)に進路交流会を開催し、50名の参加がありました。

毎年、中学校を卒業されたご本人と保護者の方から、進路決定に至るまでの体験談や現在の生活についてお話を聞かせていただき、今後の進路選択の一助としてもらえるように開催しています。今年は、高校に在学中の方と就労している方、それぞれの保護者の2組からお話を伺いました。

参加者からは、今後の進路を考えるうえで参考になったとの感想を多数いただきました。コロナ禍の中でも多くのお申込みがあり、支援を必要とするお子さんや保護者の方の関心の高さを改めて感じました。



巡回図書を紹介② ~今年度は4セットを巡回しています~

発達支援センターでは、発達支援、発達障害についての理解、啓発を図るため、市内の校園に発達障害についての図書を巡回しています。図書が校園に巡回した折に、ぜひお手にとってみてください。

Bセットは、以下の6冊です。(次号はCセットを紹介します)

- | | | |
|----------------|-------------------|---------------------|
| (1) つながろ! | (2) ぼくはじっとできない | (3) 算数の天才なのに計算ができない |
| (4) なまけてなんかない! | (5) やましたくんはしゃべらない | (6) へんちゃんのポジティブライフ |

*そのうちの1冊を紹介します。

「つながろ!」~にがてをかえる? まほうのくふう~ さく・しまだようこ

発達障害のクラスメイトへの工夫や支援をとおして、自分たちにとってもわかりやすい環境をつくりだす子どもたちが描かれています。なぜ発達障害の子どもが、このような行動をするのか?こういう接し方だと、なぜわかりやすいのか?なども巻末に掲載されています。

子どもが読んで、学べる。教員が読んで、実践できる。保護者が読んで、安心できる。

「苦手だからだめなのではなく、その人がみとめられたり『努力できる』と思える『ありのまま』でがんばれるようになる“まほう”をみんなでさがしましょう。



おしらせ

「発達障害を知ろう」~市民啓発講座を開催します~

テーマ:「こどもの睡眠」についての現状と課題 ~発達凸凹との関連性~

日時:12月4日(土)午後2:00から午後4:00時まで(開場 午後1:20)

場所:守山市民ホール 小ホール

講師:滋賀医科大学 小児科学講座(小児発達支援学部門) 特任准教授 阪上 由子氏

対象:守山市在住・勤務で15歳以上(中学生不可)の方

参加費無料

事前申込制

(定員100名先着順)

※お申込み方法は11月頃に広報やホームページ等に掲載します。

～愛着障害について～

近年、保育や教育の現場において、「気になる子ども」という言葉が定着してきました。様々な問題を抱え、支援や指導に困難さが感じられる子ども達を指す言葉として用いられていますが、その問題の背景に発達の課題や特性だけでなく、“愛着”の課題を抱える子ども達も潜んでいると言われています。

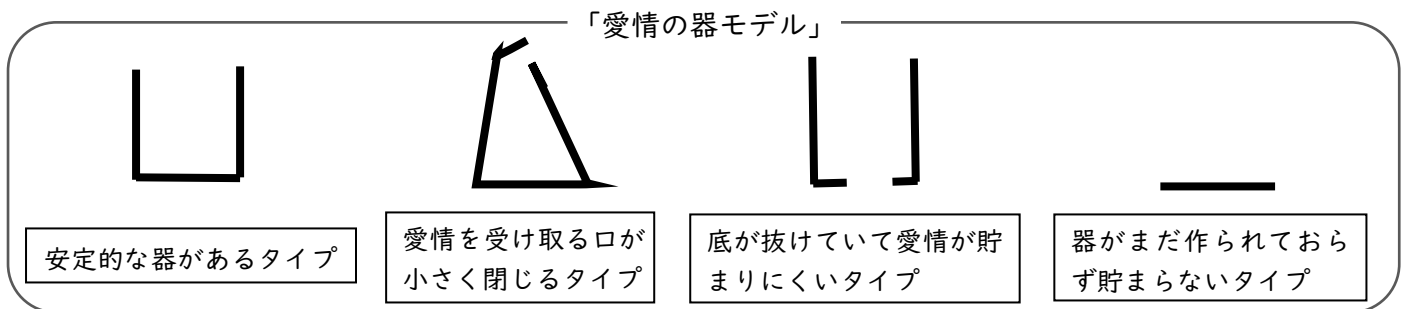
○愛着とは？

愛着とは、「特定の他者との間における情緒的な絆」のことを指し、恐怖や不安から守ってくれる【安全基地機能】、そこに行くとはっとする【安心基地機能】、そこから離れても大丈夫で離れて行ったことを報告して認めてもらう【探索基地機能】の3つの機能があります。この絆が育っていない状態を愛着の問題と言い、愛着に課題がある場合、衝動的な行動、他者の注目を求めて相手の反応を試すような過剰な行動、自己肯定感の持ちにくさ、自己防衛のための嘘や暴言といった姿が見られるなど、他人と上手く関わることの苦手さが生じることがあります。

○愛着に関するよくある誤解

愛着は母子相互の関係として捉えられることが多くありましたが、近年では“関係性の障害”と捉えられており、親の育て方だけに問題がある、子どもだけに問題があるというものではなく、その子の特性、特徴と親の育て方が合わない、つまり相性の問題として捉えられています。

下図は子ども達の愛情の受け取り方のタイプの一例を示した「愛情の器モデル」です。



愛着の課題から生じる問題行動に対して、「愛情の器」が整っていない子どもを叱ることは、根本的な問題解決にはなりません。厳しい対応で一旦落ち着いたように見えても、他の場で問題行動が生じる可能性があります。

また、これまで愛着形成には適した時期があり、子どもが大きくなると修復が難しいという考え方がありましたが、実は適切な愛着修復の関わりがなされていないから、そう見えるだけであり、愛着形成は生涯的に発達するもの、また親だけでなく、誰とでも修復が可能であると言われています。そのため、まずは安心できる大人との関係を丁寧につくっていくという視点が支援において大事になります。

